日本語・ウズベク語慣用句についての考察

トゥラポヴァ・ナルギーザ
ウズベキスタン国立世界言語大学

要旨：日本語の慣用句は「いくつかの語を続けて、ある特定の意味を表すことが習慣 的に行われている表現」 とよく定義されている。ま た、慣用的な言い回しをも含み、比喩的なものが多く、日本やウズベキスタンの生活・性向・発想を探る格好の材料となる。著者は本稿に日本語やウズベク語においての慣用句の定義を考察してみた。

Abstract: Phraseological units of all languages have their own special forms of expressing. Phraseological units are used in everyday life. The origin of phraseological units are from society, they conform the personality of every society and reflect national figures, the customs of the nation, the way of thinking and character of different nations. In the following article the author tried to find out, how much was studied the phraseological units of Japanese and Uzbek languages and made research based on the statements of researches who worked with phraseological units.

はじめに

慣用句は、私たちの日常の会話や文章の中で数多く使われている。それらはたいてい短い言葉であるが、人間の生活経験から生まれ、そして社会生活の中で育まれて、その社会の世界観や風俗習慣などが色濃く現れ、それぞれの国の人々の気質や考え、生活習慣や、国民性などをよく映し出している。日本語の慣用句も日本人が好んで用いるもので、日本語学習者の学習上、欠かせないものである。

日本人にはすぐにその精神的意味がわかるが、ウズベク人にとってはわからない場合があり、どうしても翻訳できないものがある。また、慣用句には、その国の言語独特の伝統というものをうかがうことのできるものが多い。本稿はウズベク語と日本語の慣用句の比較を通し、ウズベク日本の国民性の違いについて考えていきたいと思う。

1. 日本語の慣用句とはなにか

日本では慣用句に関する研究として、「慣用表現」と「慣用句」表現が用いられているようであるが、研究者により対象範囲が異なっており、その概念は一筋ではないようである。日本語とウズベク語における慣用句の定義と対象範囲は研究者により異なる。日本語とウズベク語は文の構造が似ていると言われる。ただし、文の構造が似ているとは言え、慣用句は統語的構成上にも意味上にも固定されているという性質を持つため、その固定性の中で個々の言語ならではの統語的・意味成立の特徴が現れるはずである。

以下、日本語とウズベク語における慣用句の定義をそれぞれ確認していく。日本における慣用句についての研究は活発に行われていて、比較的に早いものには、森田良行（1966）、宮地裕（1982）などがある。森田良行（1966）は「慣用的な言い方について」では、慣用的な言い方は

辞書的意味の理解や文法的知識のみでは理解できないことを指摘している。そして、慣用句を5つのタイプに分けている。

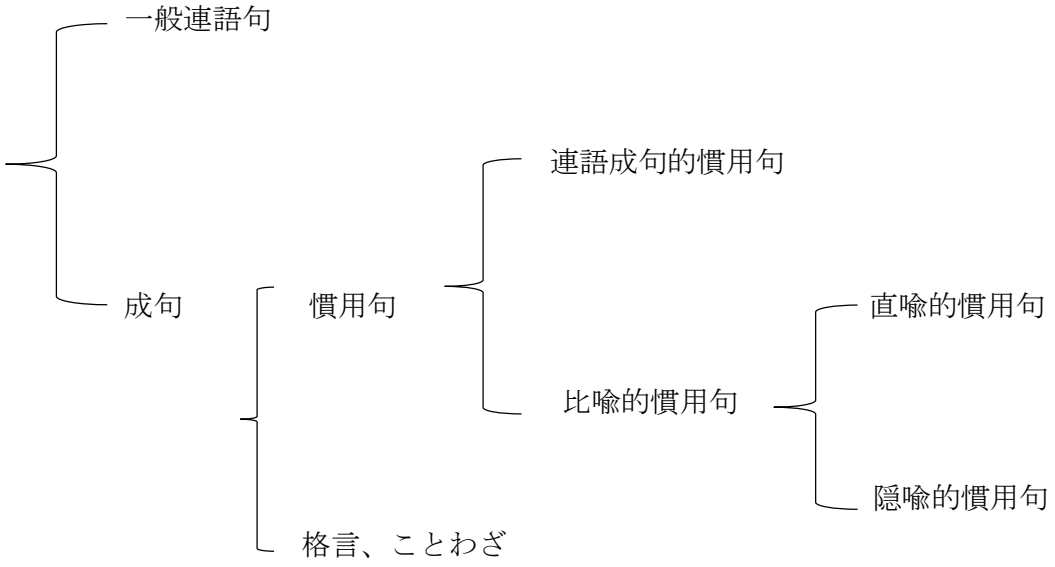
（1） あいさつ語、応答語。（例えば：ありがとう、おはようございます）
（2） 慣用化された特定の言い回し。（例えば：～して余りがない、～を事ともしない）
（3） 慣用化されている文語表現。（例えば：～ざる得ない、さればこそ～）
（4） 叙述の語が慣用として固定しているもの。（例えば：汗をかく、うそをつく）
（5） 比喩が慣用化したもの。（例えば：油を売る、顔が広い）

さらに、森田良行（1966）は慣用句教育へも自分の提言をした。ただし、森田は慣用表現についての分類は幅広すぎて、その本質についての解釈も明快なものとは言えないと思う。

宮地裕（1982）は「慣用句という用語は、一般に広く使われているけれども、その概念がはっきりしているわけではない。ただ、単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だという程度のところが、一般的な共通理解になっているだろう。慣用句は、一般の連語句よりも結合度が高いものだが、格言、ことわざと違って、歴史的、社会的な価値観を表すものではない。」と指摘している。宮地は慣用句の概念を明らかにしただけでなく、格言、ことわざとの違いも説明してくれた。さらに、品詞別の特徴、語彙的な特徴、形式上の特徴、形式上の制約から見た特徴に分けて論じている。宮地裕の研究は、慣用句の概念規定や分類にとどまらず、具体的な用例を集めて、日本語、中国語、韓国語、英語、フランス語、タイ語などの多言語間の対照研究も行っている。

宮地裕氏は、慣用句を連語成句的慣用句と比喩的慣用句にわけ、比喩的慣用句を直喩的慣用句と隠喩的慣用句に分けている。詳しくは次のような図で示されている。

慣用句の分類図



慣用句を上記のように分類している。「慣用句」は「連語成句的慣用句」と「比喩的慣用句」から成り、「比喩的慣用句」はさらに「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」に分けられる。宮地裕氏の示されたそれぞれの実列の一部は次のようである。

（1）**連語成句的慣用句**

手を染める、駄目を押す、電報を打つ、コンプレックスを持つ、パイプを通す、パイプをつなぐ

（2）**比喩的慣用句**

直喩的：赤子の手をひねるよう、水を打ったよう

隠喩的：羽をのばす、兜をぬぐ、烙印を押す

宮地（1982）では、一般の連語句より結合度が高いものを「連語成句的慣用句」と言い、比喩表現の中で『～のよう』、『～の思い』などを伴っているものを「直喩的慣用句」、語句の意味が派生的・象徴的で、全体として比喩的な意味を示すものを「隠喩的慣用句」としている。

国広（1985）は、「二語以上の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ないもの」と定義している。国広（1985）は、宮地（1982）の定義をさらに詳しくし、形式と意味の両面からの分類を行っている。

籾山（1997：30）は、「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの」と指摘している。籾山は、表現全体の意味が構成語の意味の総和から導き出せない場合のみ慣用表現と指摘し、構成語の一部のみが字義的でないものは慣用表現に含めていない。この点に関して、宮地では「目が高い」は、それぞれに「鑑識力」「厳しい試練」という転義であるだけで、構成語の意味の総和として句全体の意味が理解可能であり、慣用表現であるよりもむしろ連語の部類に属すると指摘している。

田中（2002a:6）は「その構成語の基本的な意味から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現である」と定義している。

以上から、「日本語の慣用句は2 語以上から成り、構成要素の総和により全体的に一つの意味を表し、構成語個々の意味から予想しにくい表現である」のようにまとめられる。さらに、辞書記述による定義も参照する。

慣用句とは、二語以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の元来の意味から決まらないような慣用的表現である。骨を折る、油を売るなど。『広辞苑』第六版（岩波書店 2008）

二つ以上の語が結びついて、習慣的に使われ、特別な意味を表す言い回し。例えば、油を絞る、道草を食う。『精選国語辞典』（明治書院 1994）

二語以上が結合し、その全体が一つの意味を表わすようになって固定したもの。例：道草を食う、耳にたこができる。『大辞林』第二版（三省堂 1995）

各語の総和では説明しにくい固有の意味を構成するという点で、意味的には一語であり、かつ、接合部に他の要素を挿入することを許すという点で、文法的には一語でない、文節以上文以下のまとまりを慣用句という」。『日本語表現・文型辞典』（朝倉書店、2002）

2. ウズベク語の慣用句とはなにか

ウズベク語における「慣用句」の位置付けを示しておきたい。ウズベク語では日本語の「慣用句」に当たる概念は「FRAZEOLOGIZM」と言う。ウズベク言語学者は慣用句に関しての興味は 1950 年から起き、慣用句についての研究は活発に行われてきた。先行研究者として Rahmatullayev（1952）は、「現在ウズベク語の慣用句についての考察」では「慣用句とは、意味においてその構成要素単独の意味が失われ、総和した 1 つの意味や概念を表し、当国民の思想や生活、習慣、慣習、宗教などを反映した定型的な総和表現である」という指摘は、慣用句に当該国民の生活習慣をはじめとする文化的な背景が反映されていることを示唆している。さらに、慣用句を 3 つのタイプに分けられている。

(1) 慣用句保全（Фразеологические единства）
(2) 慣用句接合(Фразеологические сращения)
(3) 慣用句結合(Фразеологические сочетания)

Husainov（1959）（慣用句についての考察）では、「いつでも二つ以上の単語が一続きに、または、相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表すものをさす。」さらに、Rahmatullaev 氏の述べたことに「慣用句のもう一つのタイプがあり、イディオムといわれるものだ。または、ことわざ、格言は慣用句として言えるか、疑問になっている」と定義している。

Mamatov (1991) は「慣用句とは、当言語においては構成要素の単語の意味が失われ、表現全体で一つの意味を表す固定的な結合語である。慣用句は、二つ以上の語彙から成るが、文の中で一つの単位として扱われている」のようである。さらに、慣用句のの形式的や意味的にの特徴につ

いては次のように記述している。

- 語数が殆ど2語以上からなり、末尾が動詞が多く、動詞には命令形使わない。
- 複数の構成要素からなり、一部の表現は語の構成や配列が不明瞭である。
- 慣用句の構成要素の意味が隠喩的である。

さらに、ことわざや格言は上記述べた特徴に相当されたら、慣用句と言える」と定義している。

おわりに

日本語とウズベク語における慣用句の定義を調べたところ、慣用句について共通する概念を持つことが分かった。日本語において、宮地（1982）は「語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」であると定義している。他に、国広（1985）においても「二語以上の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ないもの」とし、籾山（1997：30）は「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの」とし、田中（2002）では「その構成語の基本的な意味から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現である」とそれぞれ定義している。

ウズベク語の慣用句（Frazeologizm）に関して、Rahmatullaev（1985：3）では「慣用句とは、当言語においては構成要素の単語の意味が失われ、表現全体で一つの意味を表す固定的な結合語」である。そして「慣用句とは、意味においてその構成要素単独の意味が失われ、総和した一つの意味や概念を表し、当国民の思想や生活、習慣、慣習、宗教などを反映した定型的な総和表現である」。Mamatov（1991）では「ある成句を成す語彙を別々に取り扱うことができず、個々の意味が失われ、総和的に一つの概念を表す連語を慣用句という」と言い、「慣用句の形式的や意味的に特徴がある」も定義している。

以上から日本語とウズベク語の慣用句について、下記のようにまとめられる。

① 2つ以上の語から成るが、文節以上の構成である
② 基本的に、定型的な形式構成を持つ
③ 表現全体で示す意味としては一語であるが、統語上ではいくつかの構成要素から成る
④ 表現全体で1つのまとまった意味を表すものであり、構成語彙の個々の意味からは想定しにくい
⑤ 語彙・統語的に分析不可能な点、末尾がが動詞が多いこと、比喩的な意味が多いこと、さらに教訓的な意味を示さないことなどにより諺とは異なる性質を持つ

参照文献

石田プリシラ（1998）「慣用句の変異形についてー形式的固定性をめぐってー」『筑波応用言語学研究』5 号、43-56.

国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』第 4 巻第 1 号、4-14.
田中聰子（2003）「心としての身体 慣用表現から見た頭・腹・胸」『言語文化論集』第 24 巻第 2 号、111-124.
宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
宮地裕（1977）「慣用句と連語成句」『日本語教育』第 4 巻 1 号、298-310.
森田良行（1985）「動詞の慣用句」『日本語学』第 4 巻第 1 号、37-44.
森田良行（1989）「人間関係を表す慣用表現」『言語』第 18 巻、岩波書店、35-41.
籾山洋介（1997）「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に－」『名古屋大学国際国文学』80 号、29-43.
籾山洋介（2006）「認知意味論の新発展－メタファーを中心に－」『日本語認知言語学会論文集』6 号、505-507.
Surenjav Oyunzul（2014）『日本語とモンゴル語における身体語彙慣用句の対照研究－「目」を含む慣用句を中心に－』広島大学大学院国際協力研究科博士論文
Маматов А.Э. Проблемы лексико-фразеологической нормы в современном узбекском литературном языке. АДД. – Ташкент: 1991.
Маматов А.Э. Ҳозирги замон ўзбек адабий тилида лексик ва фразеологик норма муаммолари. – Тошкент: 1991.
Рахматуллаев Ш.У. Основные грамматические особенности образных глагольных фразеологических единиц узбекского языка. АКД.,- М. 1952.
Хусаинов М. Фразеология прозы писательницы Айдын. АКД.,- Самарканд, 1959.